

# 兒童心理學 第二講

## 親と子の問題 (二)

牛 島 義 友

**眞實の親** 前回は兩親揃つて居ても尙育兒上色々な問題がある事を述べた。今日は兩親が揃つていない場合の諸問題について考へよう。親は單なる保護者ではなく、血の連りのある保育者である。血の連りがあればこそ子供が調子良く成長して居る場合のみならず、子供が出来である場合、不良や不具や低能である場合にも強い愛情が湧いて来る。否斯る場合の方が一層強く親子一體の感が強くなり、子供の不幸は自分の責任であるに痛感し、凡てを犠牲にしても子供の幸福を念願する様になる。此の眞實の親の愛は神祕的なものではあるが未だ理解する事が出来る。然し子供の眞實の親を求める氣持は一層不可思議なものである。

親切な保護者、養ひ親に愛育されて成長したのならば、それでよさそうなのであるのに何故それに不満なのであらうか、何故血の連りを求めてやまないものであらうか、子供の本能だと言つてしまへばそれまで、あるが餘りに神祕的な感情である。

此の子供の眞實の親を求める氣持を完全に分析する事は出来ない。併し之に關係のありそうな要素を少し考へてみよう。

「みかへりの塔」の最初に引例されてある問題兒は興味深い例である。即ち十一歳の時に感化院に入つて來た子供、些細なことで「度怒る」氣狂ひのやうに喧嘩し、相手が強ければ強いほぎ、ますます「亂暴になつて行く子供、教師や保母の訓言も、鐵板でも張つたやうな彼の心からはね返るだけで、少しも中に徹せず、氣に入らぬこゝがあれば外に飛び出してしまふ子供。さうして斯んな子供が出来た

のであらうか、眞實の母親からは切なる手紙が度々来る。嚴寒の最中に水垢離する五十の老母、子供の改心を祈つて九十餘日を費して四國巡りをする母親が居るにも拘らず何故に彼は不良になつてしまつたのであらうか。彼の不良化の原因と言ふのは實はこれ程までに吾子をいこほしんで居る母親の眞實性を疑つて居る事であつたのである。此の眞母を自分の眞實の母親とは思はず、別に母を求めて苦しんだあげく亂暴をして居たのである。彼が自分の眞母を疑ふ様になつた事件は全く文字通り子供欺しの事であつた。

——彼は小さい時からいたづら者だつた。一人息子で甘やかされたところもある。七歳ばかりの時、あまり惡戯がすぎるので、母は彼をおごかした。「私はお前のやうないたづら者のお母さんではない。お前のやうな者は、學校にも家からはあげられない。お前のお母さんは和歌山の自轉車屋にゐるから、この上悪いことをしたら、そちらへ返してしまひますよ。自轉車屋に行つてしまひなさい。」ふささう言つたのがもさで、和歌山の自轉車屋が何度か使はれた七歳位の幼児に話された欺し文句、之が全く致命的に作用して居たのである。従つて後になり此の和歌山の自轉車屋一件が全くの作り噺である事を知るや今までの亂暴は鎖まり誰にもまして母を慕ふ様に變つた。

此の悲喜劇は兒童心理學に教へる處が非常に多い。子供

は何故一片の嚇文句を眞に受け、激しい心の悩みやもつれを引起してしまふのであらうか。この事には二つの事が考へられる。第一は親の愛情への疑惑である。親の愛を子供が疑ふ等とは前述の事と矛盾もし、到底あり得ぬ事の様ではあるが、幼児は案外に親の愛を疑ふ。幼児は多分に唯物的であり自己本位である。幼児は直接自分にお菓子をくれ、愛撫し、面倒を見てくれる人に愛情を感じる。少しでも親の愛撫の手がゆるむと非常にさびしがり、何さかして親の注意を自分に惹き付けてをかうして色々な策を用ひる。母親と話をしてをる父親に向つて「お父さん少し散歩していらつしやい」と言つたり、來客があるに殊更にぐづついたり、弟妹が生れると激しい嫉妬を感じて、赤ん坊の様に懷かれんさしたり、赤ん坊をいじめたりする。斯る自己中心的な唯物的な愛情感の爲に幼児は時に自分の親の愛を疑ふ事も起つて來る。

第二の原因は幼児の童話的な考へ方である。幼児は童話の世界と現實の世界との區別が完全には出來てゐない。童話の世界が其の儘實現するかもしれないと思つて居る。童話の中には捨子や貰ひ子や繼子の話が澤山盛られて居る。従つて若し幼児に「お前さんは橋の下から拾つて來たのだよ」と言つてからかふと相手は眞に受けて心配し出す。斯る事は年長の者がよく用ひるからかひの言葉であるが幼児に

及ぼす影響は極めて大きい。毎晩寝る時には親に捨子で無い事を確めなければ寝付かない子供等も出来て来る。これ程までに子供は冗談を眞に受けてしまふ。

以上の事等が原因になつて子供が親を疑ふ様な事まで起つて来る。而も唯疑ふばかりでなく、それが原因で不良化してしまつたりしては大問題である。

**養子、里子** 小槽三合あれば養子に行くなとの言葉もある位であるから成長して後に養子となる場合にも多くの心理的問題が在らう。併し茲では乳幼児期から養子になつて居る場合を考へよう。此の場合養家も子供が欲しくつて養子するのであり、子供の方も無心の小兒であるから幼少年時代には大した問題もなく順調に育つ、子供は養父母を眞實の親と思ひ込んで甘えたり我儘を言ひ乍ら育つて居る。

問題は此の子供が自分が養子であり、眞實の親は別にあると言ふ事を知つてから發生する。此の餘計な知識はお節介な近所の小母さんとか乳母さんか中等學校入學の時の戸籍抄本等色々なこゝから與へられよう。併し此の場合誰が悪いと言ふ譯ではなく青年期に達する頃には自ら判つて来るのが普通であらう。此の餘計な知識によつて發生して来る子供の心の苦しさは此の密告者に責があるのではなく、又養父母に缺陷があるのでもなく、全くさうする事も出来ない心理的な感情である。今まで眞實の親を信じ切つて居た

けに裏切られたとの氣持が強い。之は説得で落付く様なものではない、理窟を超えた淋しさである。今まで快活な少年であつたのが一朝にして憂鬱な少年に變つてしまふ。此變化は防ぎ様の無いものである。方法としては唯其程度を緩和さす事だけが考へられる。此大きな心の衝撃でも精神の平靜な時に起れば比較的輕くてすむ。分別のある成人ならば之に耐へられよう。併し精神の最も動搖してをる青年前期、中等學校時代に起るさ全く致命的な作用をなす。さなきだに此時代は親に對する信頼を失ひ、反抗的になつて居る時代である。此時代に自分の親が眞實の親でない事を知るさ、青年の凡ゆる不幸、惱、憂愁、反抗が此事に結び付けられ、激しく養父母をうらみ憎む様になつて来る。故に此養子であるとの知識は青年期になる前に與へるさよいと言はれる。併し少年期だから無關心に聞いてくれる譯ではない。如何に愛情深く、條理を立て、言ひ聞かせても子供の受ける衝撃は大きい。だから一番よいのは矢張養子をしてない事であり、若しするさすれば成長してから後に入養子でも取るのが一番問題がない。

眞實の親が別にある事を教へられるさ其親を求める氣持が急に強く湧いて来る。それならば實家の方に返したらよさそうなのであるが、併しそれも巧く行かない。養父母に對しては裏切られた氣持もあるが、又同時に長年の愛育

に對して愛情も残つて居る。實家に歸されるさ今度は此愛情の方が強く働いて来る。又實家に對しては血の連りさしての連結感はあるが、長く離されて居た爲に生ずる冷々さ、自分の子供を他人にやつてしまふ様な薄情さが感じられて来る。此爲に彼は養家では不満であり、實家では冷遇される様に感じて、何處にも自分の安住の家が無い全くの孤獨感に襲はれる事になる。

此氣持は養子の場合のみならず、長く里子に預けた場合にも同様に起るらしい。下村湖人氏の自敘傳的小説「次郎物語」は此間の子供の心理を巧に描寫して居る。此小説は少し説明的調子が強すぎて、眞の子供の生活さ少し違ふ様でもあるが、斯る境遇の子供の心理を實に巧に描いて居る。無心の子供さ成人が軽く考へて居る子供の心の中に激しい嵐が吹き荒んで居る事を教へてくれる。

**繼母** 繼子繼母の問題は一番厄介な問題である。父は異つても實母であれば問題は遙かに少なからう。子供は母と一緒に生活する時間が遙かに多いから。併し父が亡くなつた場合には連子して再婚するよりも母の手一つで遺兒を育てようとする場合が多いから、實母異父の場合は少く、専ら異母實父の關係になつて居る。而して斯る不幸な例が非常に多い。十人居れば一人か二人は繼母の問題で悩んで居る。繼子は既に今度の母は實の母でなく繼母である事をは

つきり知つて居て、新しい母が来る前から警戒し、反感を持つて居る。子供は繼母に對して悪い先入主を持つて居る。此偏見を授けるものは多くの物語である。繼子いちめの話は非常に澤山ある。子供達は繼母は繼子を虐使するものだ、粗衣粗食で臺所の隅で働かせるもの、實子ばかり愛して自分達を憎むものさ思ひ込んで居る。

斯る偏見を懷いて居る子供達の中に入るのであるから新しい母親も氣の毒である。彼女は繼母子關係が困難である事は充分覺悟して縁付いて来る。自分こそは模範的な繼母、實の母より愛に満ちた態度で教育してやらうさ決心してやつて来る。併し此決心が既に誤つて居るからいたましいのである。實母でない者が實母の様に或は實母以上の態度で臨まうとする處に無理がある。彼女は一心にそれこそ實の親でも出来ぬ位に細々さ行さういた世話をするであらう。教師がこれ丈熱心に仕事をすれば必ず教育効果は上る。然るに繼母の努力は報ひられぬ努力である。偏見を持つた子供は繼母の世話をうるさいと思ふ事もあらうし、何か思ふ様に行かぬ時には直ぐ若し眞のお母さんが居たらばと思ふであらうし、思ふだけでなく態度にも現れて来る。斯る子供の態度に出遭ふさ、努力して居る母親程落膽せざるを得ない。これ程までして子供の世話をしてやつて居るのに、さ情無く感じるであらう。子供が言付けに従はなかつたり

ひねくれた場合、實の母ならそれ程氣にしくなくとも、繼母なるが故に非常に氣になる。斯る場合には夫の愛情と夫の裁斷に頼らうとする。併し夫の愛情には何か隔てが感じられる。夫は普通最初の妻に對する様な愛情を持つ事は困難であり、妻に對する態度に多少事務的、便宜的な態度もあらうし、時に亡妻を想ひ出す事もあらう。或は後から來た妻にはよく判らない話題を子供達と交して楽しむ事もあらう。斯る場合に妻は全く取殘された様な氣持、其家庭の中に入り切れない淋しさを味はされるであらう。

又繼母子間に問題が生じた場合に實父の取る裁斷が兎角當を失し勝である。彼は妻に同情する餘りに大した事でもなくとも子供をひどく叱る事もあらう。斯る場合子供は父親までも自分達を冷遇するに感じて家庭が一層冷たく感じられて来る。或は又反對に子供が言ふ事をきかない場合に、「お前の教育の仕方が悪いのだ」と繼母を叱つて子供を不當に庇ふ事も起らう。斯る場合子供は繼母に對し一層反動的にならうし、繼母の方は全く身の置き處が無くなる。これ程までにしてやつてゐるのに子供がなつかないのなら一層の事と言ふ氣持に變り、育児に對して興味を失ひ、自分の興味を追求し、放縱、虚榮に流れる事もあらうし、若し自分の子でも生れてくれれば其方に専心し、繼子の方は忘れ勝ちになり、繼子がひねくれるに腹立たしくなり、繼子虐待にまで進む事も起らう。

十歳位の感化院に居る女の子でさうしても家へ(繼母)歸らうとしない者も居るし、一般に繼母子間が巧くいって居る例は聞いた事がない。みんなに優れた女性でも、實子の方は立派に育て上げた母でも繼子との間は巧く行つて居ない。

斯くも困難なる繼母子の問題に對しては然らば如何に處したならばよいであらうか。この一つの徹底的な對策は「繼子を吾子と思ふな、繼母を實母と思ふな」と言ふ態度で臨む事である。繼母の方から言へば吾子と思はうとするからこそ教育効果が出なくて腹立たしくなるのであつて、初めから繼子と言ふものは如何に努力しても實子の様にはゆかぬもの、それは自分の徳の足りない爲ではなく繼母子と言ふ心理的關係が問題を歪曲してしまふのだと言ふ事を達觀し、觀念して掛れば、假令子供がなつかなくなつたり、邪推する場合でもそれは繼子の心理だと思つて、腹立たしくなるよりも氣の毒にならう。

又子供の方に對しても、今度來る人を眞の母さんと思つて孝行せよ等と訓さない方がよい。眞の母と思ふと繼母の處置が事ごとに不満であらう、然し若し他人だと思へば、他人の割には随分親切な、行届いた人であるとして感謝する氣持が湧かう。故に青年期に達して繼母の問題に悩んで居る人には斯の様に母に對する態度を改める事をすゝめて居る。